

「もし、肌があなたが住む1番目の家屋としてみなすならば、」

「カリーナ、君が藤野で制作した4つの作品を結ぶものは何だろう？」

コミュニケーション

もし、誰かが、肌が第1の層で、

衣服が第2の層で、

そして、家屋が第3の層と考えるならば、

その途端、その人はコミュニケーションの入り組んだ空間へ侵入したことになる、

私の作品であるビデオ・テープとインスタレーションはこれらの層を象徴する。

「このコンセプトの観点から、これらのインスタレーションの特徴を述べてくれますか？」

これらのインスタレーションは、現実と空想の空間、外側と内側、公共と個人の空間を探求しています。そうすると、その形状と空間は崩壊し、その意味は循環し、その境界は透明となり、ひとつの溶融が発生し、そして、この融合が私の真の住処です。

「共有する家」ナンバー1 (Shared House #1)においては、イベント・パークを訪れる一般の人たちのための場を創作しました。緑溢れる景色の中の赤い建造物は、来訪者の興味をひき、彼らを建物内部へと誘います。ピクニック、物思い、雨宿り、休息のための場、つまり、新しいアイデアを育むためのサンクチュアリ（聖域）としての家として解釈可能です。

赤い木製建造物の壁にはたくさんの小さな穴があけられていて、日光がこの穴から内部に入ってくるようになっていきます。この光のドロ잉は、人間のシルエットを表現していて、内側と外側の間に介在するフィルター、もしくは、この表現がお気に召せばですが、来訪者の精神世界と現実世界との間に存在するフィルターです。

「共有する家」ナンバー2は、空き家となってしまった小屋の内部を、黒い衣服の縫い目部分のみを残すように切り抜いたもので再構築した作品です。この第2の層である衣服は、蜘蛛の巣状に、また、拷問の道具のように連結しあっています。その場が創り出す雰囲気は何者も免れえない死を表現していますが、ほどなく、自然がその場をとって代ることでしょう。

「永遠に、富士山を探し求めて」(In search for Mount Fuji, Forever) も、空き家となった別の小屋内部が舞台となっていますが、ここでは公的な象徴をより個人的なレベルへと変換しました。

この3番目のスーツケースを使用したインスタレーションには、そのスーツケース内側部分が私の肌の写真で覆われています。

そのスーツケース内には、額装された富士山の写真がセットされていて、その景色と私の肌が第3のレベルで混在します。

それは、肌とともにある景色、あるいは、景色とともにある肌という1つの溶融です。

「そして、オープニングで上映されたビデオ作品、「スモウシェイク」(Sumoshake= 相撲振)の役割は何？」

スモウシェイクはある感覚に覚えるスリルを表現しています。相撲の立ち合いの強い力の激突の瞬間に興味を覚えました。それは、西洋人主催の相撲のトーナメントを舞台に、西洋文化の中に表現された日本の伝統とイメージのミックスに対しての願望と失敗に関係しています。それは、奇妙なビデオ・カクテルとでも言うか、初めは、甘くユーモラスでエロティックな味なんですけど、しばらくすると、何か苦味と不快感を感じるといった比喩で分かっていただけでしょうか。

コミュニケーション： レシピなきレシピ

スモウシェイク・カクテル

焼酎（日本製ウォッカ） 100ml

レモン・ジュース 30ml

ザクロ・ジュース 30ml

インタビュー L. セモ (L. SEmo)